

## 古社叢の「聖地」の構造 (4) ——大神神社の場合——

田中 充子  
TANAKA Atsuko

### はじめに

大和盆地の東南にある三輪山(467.1メートル)は円錐形の美しい山容をみせる。古来、大物主神<sup>ものぬし</sup>が鎮まる山とされ人々に愛されてきた。典型的な神奈備山<sup>かなび</sup>である。山頂に奥津磐座、山中に中津磐座、山麓に辺津磐座という三つの磐座群があり、古代信仰の原像を今に伝えている。また頂上近くに高宮<sup>こうのみや</sup>という小祠がある。神体山としての信仰が古代から現在までつづいているのである。

三輪山は全山が禁足地とされ、人はみだりに足を踏み入れることはできない。一般の人に開放されているのは、ただ一本の険しい道で、頂上へ通じている。山麓には、わが国のもっとも古いヤシロとされる大和国の一宮大神神社<sup>おのみわ</sup>が鎮座している。

よく知られるように、このヤシロに拝殿はあっても本殿はない。前号で述べた諏訪大社にも本殿はない。じつは本殿のないヤシロこそ、ほんらいの神祭りのありようと、その信仰を反映しているのである。

参拝者は拝殿の奥にある三ツ鳥居(三輪鳥居)を通して直接、三輪山を遥拝する形になっている。その奥は禁足地である。現在ある拝殿は寛文4年(1664)に造営されたもので、それ以前は三ツ鳥居だけがあって瑞垣<sup>みずがき</sup>をめぐらした山だった。

三輪山は、大和盆地のあちこちから遥拝することができる。とりわけ山頂から昇る日の出は、三輪山の古代信仰を考えるうえで重要な意味をもっている。(図1)

三輪山信仰にかんする研究は、古くから多くの研究者によってすすめられてきた。膨大な数の論文や著書が発表されている。しかし、その多くが三輪山の神々の研究である。

本論では、古代において大和盆地に生きた人々が三輪山信仰とどのようにかかわってきたか、ということ、縄文人、弥生人、古墳人の視点から検証を試みる。

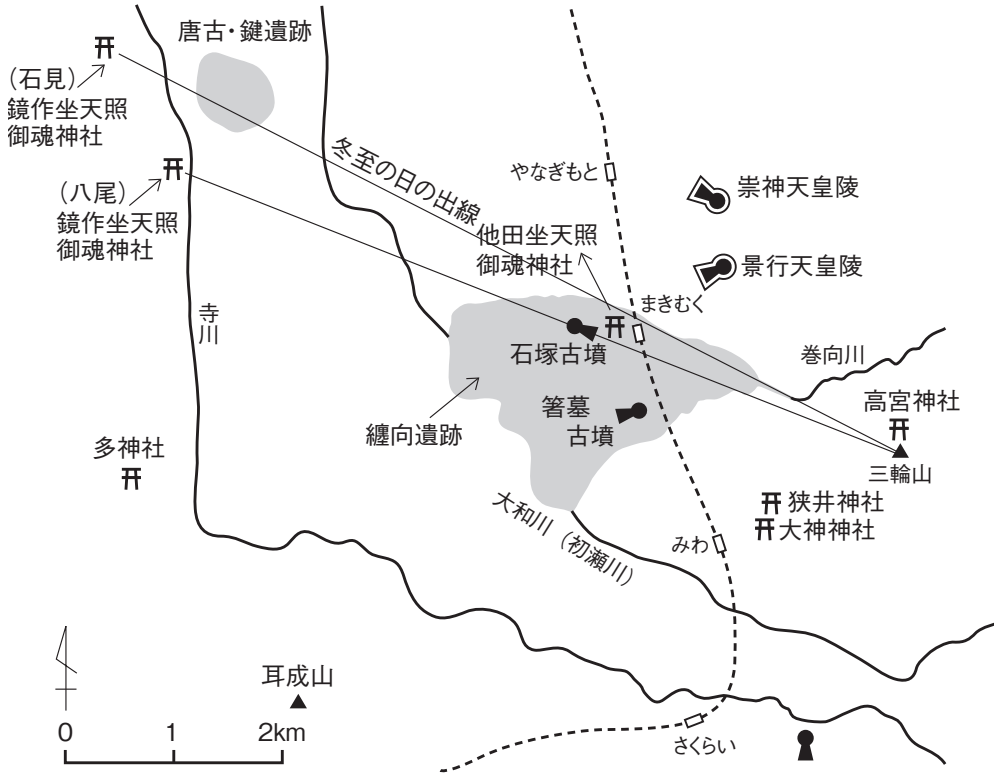


図1 三輪山と冬至の日の出線

## 第1章 『記紀』にみる三輪山の神

### 1 三輪山の神

三輪山の神は、歴史上、どのようにとらえられているのだろうか。

現存する日本最古の歴史書は『記紀』である。8世紀に書かれたもので、時代的には縄文時代、弥生時代そして古墳時代が含まれる。

三輪山の神は、第一に『日本書紀』に「依りくる神」として登場する。

国土創造神である出雲の大国主命は、ある日突然やってきた少彦名命すくなひこなと共同して国づくりをおこなう。ところが国づくりの途中、スクナヒコナは突然常世とこよをさってしまう。スクナヒコナはその服装やことばから察すると大陸からやってきた技術者とおもわれる。国づくりをした可能性がある。出雲風土記の国引き神話も、それに関係したかもしれない。そこでオオクニヌシが困窮していると、

海を光<sup>てら</sup>して依り来る神ありき。其の神の言りたまひしく、「能く我が前を治めば、吾能く共与に相作り成さむ。若し然らずば国成<sup>がた</sup>り難けむ。

すなわち、「私をまつるなら国づくりができる」という神さまがあらわれた。そこでオオクニヌシがその祭り方を尋ねると、

「吾を倭<sup>やまと</sup>の青垣の東の山の上に伊都岐奉<sup>いづき</sup>れ」と答へ言りたまひき。此は御諸<sup>のみもろやま</sup>山の上に坐<sup>ま</sup>す神なり。

つまり「大和の三輪山に奉れ」というのである。

このように「依りくる神」が三輪山の神となるということは、オオクニヌシを始めとする出雲族が、そののち大和へ進入した可能性を示す。依り来る神は、のち大国魂神<sup>おおくにたま</sup>となって宮中にまつられた可能性がある。出雲族は、紀元前に朝鮮半島から出雲にやってきた農耕民とみられる。

第二は、三輪山の神と崇神大王の大伯母の倭迹迹日百襲姫命<sup>やまとととびももそひめ</sup>との「神婚伝承」である。崇神大王は三世紀に活躍する大王である。

『日本書紀』第十代崇神天皇の条にその経緯がかかっている。

考靈天皇の皇女ヤマトトビモモノヒメは、三輪山の<sup>おおもものぬし</sup>大物主神の妻となる。そして毎夜、オオモノヌシが妻問いにやってくる。しかしオオモノヌシが夜しか尋ねてこないの「一度あなたの顔をみたい」と訴える。オオモノヌシは「それでは明日の朝、お前の櫛箱に入るが、見ても驚くな」と念をおす。翌日、モモノヒメが櫛箱を開けてみると、小さなヘビが入っていた。

モモノヒメは約束を忘れて大声をあげた。するとヘビはたちまちオオモノヌシの姿に変わり「わたしに恥をかかせたな。つぎはお前が恥をかく番だ。」と三輪山に登ってしまった。そのショックで、モモノヒメは箸<sup>ほと</sup>で陰を突いて死んでしまう。モモノヒメの死を悲しんだ人々は、大坂山の石を手渡しではこび、大市（桜井市箸中）にモモノヒメのために大きな墓をつくった。今日、三輪山のそばにある箸墓<sup>はしはか</sup>である。

これによると、三輪山の神・オオモノヌシはヘビの化身である。先述の依り来る神、あるいはオオクニタマとは別である。本来の縄文人の神である、とかんがえられる。

第三は、『日本書紀』雄略天皇七年条に、三輪山の神は大蛇<sup>おろち</sup>の姿をした雷神である、という神話がある。雄略大王といえ、五世紀後半である。

雄略天皇が<sup>ちいきこべ</sup>少子部スガルというものに「三輪山の神の姿を見たい」といわれた。スガルは御諸岳（三輪山）に登って大蛇をとらえて天皇に見せたところ、天皇は腰をぬかした。オロチの目がキラキラ輝いていたので、天皇は恐れてオロチを三輪山へ返させた。つまり、三輪山の神

はオロチの姿をしていて雨や雲をおこす雷神なのである。

これらの伝承によると、三輪山の神はヘビの姿をしている。ヘビを縄文と関係づける学者は多い。またヘビは川をさす。大和盆地には四方の山から十数本の小河川が流れ込み、盆地の中央で合流して大和川となって河内平野に流れだしている。ヘビと川の関係については本稿のテーマではないので別の稿にゆずる。

日本の山にはヘビがいっぱい生息しているが、縄文人にとってヘビは珍しいものでもなく、かならずしも恐れるものでもない。なぜなら、縄文人は山や森に住んでいるからヘビの生態をよく知っている。かれらは自然とともに暮らす、おおらかな人々である。

ところが、のち大和盆地に進入してきた天孫族は、ヘビのことには詳しくないので、ヘビに嘯まれたりして大騒ぎをしている。縄文人と進入族とは相容れない。天孫族とは、天孫つまりニギノミコトの率いる軍事勢力をさすが『記紀』にいうアマツカミである。北方大陸から紀元前後ごろにやってきた強力な軍事部族である。かれらは大和を征服する。

ヘビにかかわる神話はほかにもある。たとえば出雲族の祖先とされる<sup>すきのお</sup>素戔鳴命<sup>やまた</sup>の八岐の大蛇退治、という有名な神話がある。スサノオはやはり朝鮮半島からきたとみられる製鉄部族のオロチを退治し、その尻尾からでてきた剣をアマテラス、すなわち天孫族のリーダーに献じた。のちの「草薙の剣」である。三種の神器の一つとして大切に扱われた。なお、アマテラスは天孫族のリーダーではあるが、その出身は外来の軍事部族ではなく、先住のアマ族とおもわれる。天孫族とアマ族とは混血したとかがえられる。

ともかく『記紀』は天孫族を中心とした物語であるから、縄文人の神である三輪山の神をヘビの化身と表現したのだろう。

## 2 歴史学研究に求められるもの

『記紀』をどう読むか、ということについていろいろ議論されてきた。

たとえば、戦前、歴史学者の喜田貞吉は独自の日本民族の形成史を展開し、歴史学・考古学の立場から多くの仮説をだし『先住民と差別』など被征服者について多数の論文を発表した。しかし今日、喜田は大方無視されている。

あるいは、日本歴史学者の津田左右吉は「『記紀』神代史に書かれた内容は歴史的史実ではない。神話は6世紀いごの大和朝廷の政治思想の表現である。神話と歴史は区別するべきだ。」(『神代史の研究』)とし、従来の学説に異をとらえた。けっか、津田は禁固3月執行猶予2年の判決をうける。

これにたいし、神話学者の松村武雄は「それが説得力をもっていたのはとうじの朝野の神話的思考に合致していたからだ」(『神話学言論』)という。つまり神話はとうじの社会を説得で

きる内容であって「かならずしも荒唐無稽なものではない」という。

わたしも、神話は古代人のある種の精神文化を伝えている、とおもう。『記紀』を編纂したのは天孫族の後継者である。したがって、あくまで進入者の歴史観にたったものである。多くの研究者はそのことを無視して『記紀』を論じている。『記紀』にかぎらず、歴史書のおおくは征服者あるいは進入者の立場で書かれている。それだけではない。『記紀』をたんに歴史書としてよむだけでなく、今日明らかにされつつある考古学的知見とも重ね合わせてみる必要がある。そのことを抜きにしては、歴史の本質がみえてこないとおもう。

日本の歴史研究は、文献史学をはじめ、考古学、民俗学、神話学などそれぞれの分野で個別の研究がすすめられてきた。各個別の分野の専門家はいるが、歴史全体を通覧する研究者はほとんどいない。みなバラバラな研究をおこなっている。そのけっか、われわれには、歴史の全体像が見えてこないのである。

わたしはあえて『記紀』のなかに、今日の考古学的事実が明らかにしたものをみるのである。

## 第2章 考古学からみた三輪山

### 1 大和盆地に進入した天孫族

考古学からの三輪山研究は、比較的新しい。

日本における近代考古学は、明治10年(1877)、アメリカ人E. S. モースが大森貝塚の発掘をおこなったときに始まる、とされる。

三輪山の考古学研究については、江戸時代の「雲根志」、明治の「大和志料」、遠山正雄宮司の「いはくらについて」、「三輪山の研究」などがある。大正期には、考古学者の樋口清之が調査し、山頂と中腹そして山麓に巨岩群(写真1)が、さらに山麓一帯に多くの祭祀遺跡が分布していることを確認した。その結果「信仰の中心は大神神社の拝殿背後の禁足地であった」とする(樋口清之「三輪山における巨石群」『考古学研究』1)。しかし残念ながら、三輪山は、古来、禁足地のため発掘調査はこれ以上はすすんでいない。

考古学者の寺沢薫は祭祀遺物のなかの子持勾玉に注目し「この形はこの地域にはじまり全国へ広がったもの」と推測する(寺沢薫「三輪山祭祀とそのマツリ」和田萃編『大神と石上神体山と禁足地』)。また三つ鳥居の近くからは、これまでに子持勾玉や須恵器のほかおびただしい量の白玉が出土している。

縄文人の文化は「石の文化」である。三輪山から磐座や勾玉が出土したということは、そこに縄文人の信仰があったことを示すものである。

ところで三輪山山麓一帯には崇神・垂仁・景行など古式の大型古墳が点在している。これら



写真1 三輪山の巨石群 (中津磐座)



写真2 唐古・鍵遺跡の弥生集落跡

は4世紀前半につくられたものとされる。このことから水野裕、直木幸次郎、上田正昭、岡田精司らの歴史学者は「古墳群の被葬者が単なる地方豪族ではなく、大和以外の広い地域に君臨する大王の一族のものであった」とする(水野祐『日本古代王朝史論序説』、直木孝次郎『日本古代の氏族と天皇』)。大王一族とは、大和へ進入した天孫族のことである。

また地理学者の千田稔は、鳥根県の加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸が畿内と同じ鑄型でつくられていることから「弥生時代に畿内と出雲とのあいだには、宗教的次元での関係があった」(「出雲から三輪へ」『日本古代史「神々」の遺産』)とする。興味深い指摘である。つまり両方に出雲族がいたということだ。

ところが天孫族は、じつは銅鐸と一切関係がない。なぜなら『記紀』には銅鐸について一言も記されていないからだ。であるから、三輪山から銅鐸が出土しないのは出雲族が奉じる銅鐸を天孫族が否定していたからではないか、とおもわれる。

しかし、近年、注目をあつめたのが奈良盆地の中央にある唐古・鍵遺跡(写真2)で、弥生時代の環濠集落とされるところには銅鐸の主要な製造所跡がみつまっている。ということは、ここは出雲族の本拠地だった、とっていいだろう。

これにたいし、三輪山の周辺にはもう一つ重要な遺跡がある。<sup>まきむく</sup>纏向遺跡とよばれている。それは三輪山山麓から大和川にかけて、東西2キロ、南北2キロに広がる大集落跡である。高床式建物が並び、他の地から運ばれてきたとみられる土器が大量に出土した。邪馬台国の有力な候補地とされている。

わたしは、天孫族が唐古・鍵にすんでいたとおもわれる出雲族を抹殺したのち、纏向に新しく集落をつくったのではないかと推測する。

天孫族に滅ぼされたとみられる出雲族は、部分的に神話に登場するが、『記紀』全編をとおしてほとんど記述がない。記述が少ないのは、天孫族が『記紀』を編纂するとき、神話として



は出雲族を書かざるを得ないから少しだけ書いた、ということであろう。そのため、出雲神話は脈絡のない内容になっている。また、出雲族は農耕文化を展開しながら、大和にはない四隅突出型墳丘墓というヒトデのような形の墳墓をつくっている。

いずれにしても出雲族は謎が多い。また戦前は研究者から無視されていた。

ようするに『記紀』というのは、神話をのぞき、出雲文化を抹殺し、のちにはアマテラスをも追放したとおもわれる歴史書である、とおもう。アマテラスについては後述する。

## 2 三輪山の神・オオモノヌシの復権

大和盆地に進入した天孫族は、出雲族を抹殺し大和を手中におさめたが、疫病が蔓延し、そう簡単にはいかなかった。そこで崇神大王は、それまでまつられていなかったオオモノヌシを復権する。

『日本書紀』崇神天皇の条に、つぎのように記されている。

崇神天皇の御代に疫病が大流行して人民がたくさん死んだ。そこで天皇は、天照大神と倭大国魂の二神を天皇の御殿にまつていたが、二神が対立したのでともに宮中から外へうつした。

しかし災害がおさまらないでいると、モモソヒメが神がかりして大和の三輪山のオオモノヌシをまつることを託宣した。しかしオオモノヌシを祭ったが効果がない。その夜、夢枕にオオモノヌシが現れて、「疫病はわたしの意志によるのだから、わが子大田田根子おおたのねこにわたしを祭らせたなら国は平和になり、海外の国も降伏してくるだろう」とつげた。さっそくオオタタネコを神主としてオオモノヌシを三輪山にまつらせたなら世の中が治まった、とある。

この話は、大和が統治されていく様子を物語っているようで興味深い。

まず、宮中でいっしょにまつられていた天照大神と倭大国魂神あまてらすおのみかみ おおくにたまの御魂は「折り合いが悪くなった」という理由で宮中から外にだされてしまった。

二神はなぜ仲が悪くなったのか。

天孫族の祖神であるアマテラスにたいして、オオクニタマは、一般にその国の経営に功績があったひとびとの神とされる。二神の対立は、祖神とされるアマテラスと大和の王だった出雲族の神々との対立を意味しているのではないか。

これにたいし、第三の神としてオオモノヌシが登場する。オオモノヌシは、大和の三輪山の神、つまり「土地の神」であり「縄文の神」である。崇神は、オオクニタマやアマテラスを追放して、「縄文の神」を復活させることによって大和のひとびとを従わせようとしたのではないか。

オオモノヌシの復権は、大和湖の開拓にも関係している、とおもわれる。奈良盆地は6000年前ごろまでは一大湖だった。だいたい現在の「山の辺」あたりがその湖岸線だった。ところ

が2500年前に、生駒・金剛山山地の亀ノ瀬附近で断層による陥没がおきて、水位が50メートルほど下がった。しかし湖は小さくなくても残っていた。

亀ノ瀬附近には、むかしおおきな滝があった、という伝承が残されている。すると、滝を取りのぞいてしまえば、奈良盆地の水位はいっぺんに下がるはずだ。人間が滝の土砂を取りのぞいた可能性がある。

オオモノヌシの妻となったモモソヒメは、もともと巫女である。アマ族の出自とかんがえられる。アマ族は縄文人であり、母系制社会をいとなんだとみられるからである。その姿はついこのあいだまでの沖縄に色濃くみられる。

人民すなわち縄文人は、彼女の託宣にしたがって「大和湖」の開削をおこない、沃野が拓かれた。人民の協力なしには大土木工事はできない。崇神はそのことを考えて被征服者の神オオモノヌシを三輪山に祭ったのではないか、とおもわれる。

## 第3章 冬至の太陽

### 1 三輪山々頂の日の出

すると大和盆地には、天孫族、出雲族、アマ族という出自の異なる三種類の人々が、それぞれの神を奉じて住んでいた。それは、神社の配置のなかにも表れている。

天孫族とは、高木の神を奉じて渡来してきた軍事集団だが、のちアマテルを信仰したアマ族の一部と連携したものとみられる。

まず、この盆地にもっとも古くからすんでいたアマ族、すなわち縄文人の重要なカミは山である。かれらはほんらい山を拝み、社殿をつくらない人々であるが、山を遥拝したとおもわれる場所にヤシロがある。ヤシロとは「屋の代」であり、祭祀をおこなう場所をさす。祭のときにヤシロがつくられる。

それは、田原本町八尾と三宅町石見にある「鏡作坐天照御魂神社」という両社同名のヤシロである。

八尾の鏡作神社は三輪山々頂から西北へ直線距離にして7.3キロ、寺川にそった西側にある。(写真3) そこから1.5キロほど北へゆくと石見の鏡作社がある。この二つのヤシロについて、写真家の小川光三は「石見にあった鏡作神社が何かの都合で八尾に遷座した」とみている(『大和の原像』)。石見の鏡作神社のほうが、八尾の鏡作より古いヤシロだという。

重要なのは、石見の鏡作神社から三輪山々頂から昇る冬至の日の出が観測されることである。(写真4) そこで、冬至についてかんがえる。

今日、われわれがつかっている暦は太陽暦である。1月1日を1年の始まりとしている。こ



これはローマ帝国がつくった暦である。しかし古代は、世界中どこでも正月は冬至の次の日からはじまった。なぜか。

冬至には太陽が最も衰えて光をうしない、その翌日から日ましに明るくなっていくからだ。そのため、冬至の翌日が一年の始まりとされた。古代ゲルマン人社会は冬至が正月であった。ほかに、立春・正月といわれるモノもあるが、暦としては、冬至・正月がほんらいの姿である。

それにいちばん近いものはクリスマスだ。クリスマスは、イエス・キリストが生まれた日とされる。しかも雪の降る日に生まれたといわれ、クリスマスになっている。

しかし、そもそも砂漠に生まれたイエスに雪が降るはずはない。12月25日をクリスマスとしたのは、ゲルマン人たちの正月がちょうどそこだったからで、ゲルマン人へのキリスト教布教のために、カトリックの人たちがそれにあわせてゲルマン人の祭である冬至を、イエスが生まれた日としたのである。

日本でもふるくから冬至・正月というものを大切にしてきた。冬至・正月には、山頂から太陽が昇るといっているので冬至ということがわかる。石見の鏡作神社は、冬至の日の出を観測できる位置にある。

大和盆地には、じつは冬至の日の出を観測できるヤシロがもう一つある。<sup>まきむく</sup>纏向遺跡の近くの太田字堂久保の「<sup>おさだにますあまてる</sup>他田坐天照御魂神社」である。(写真5) このヤシロは、三輪山々頂から西北へ、直線距離にして28キロのところにある。古代史学の辰己雅之は、他田アマテル神社の近くにある石塚古墳から三輪山の冬至の日の出を観測している(大和岩雄「他田坐天照御魂神社」『日本の神々』4)。そして石塚古墳(写真6)の中軸線を三輪山とは逆方向に延長した先に、八尾の鏡作坐天照御魂神社がある。

地図をひろげてみると、石見の鏡作社—唐古・鍵集落—三輪山々頂の三ポイントが一直線上にならぶ。さらに、八尾の鏡作坐天照御魂神社—石塚古墳(他田坐天照御魂神社)—三輪山山



写真3 八尾の鏡作坐天照御魂神社



写真4 三輪山山頂より昇る太陽  
(出典:『日本古代史「神々」の遺産」  
新人物往来社 1997)



写真5 他田坐天照御魂神社



写真6 石塚古墳

頂という三つのポイントもほぼ一直線にならんでいる(図1)。大和盆地の人々は、これらの場所から、三輪山々頂より昇る冬至の日の出を遥拝した、とおもわれる。

これは、縄文人の山岳信仰、すなわち弘前市大森勝山遺跡から岩木山を遥拝する冬至の日の出、富山県上市町極楽寺遺跡から遥拝する大日嶽の冬至の日の出などと一致する。こういうところが全国いたるところにある。

そういうところには、しばしばイワクラや環状列石があることが多い。あるいは勾玉なども出土する。たとえば極楽寺遺跡から何百という黒曜石や翡翠が出土したことから、そこが玉づくりの制作工場であったとされる。

なぜ、黒曜石や翡翠が出土するかについて、建築学者の上田篤は「冬至の太陽は、縄文人の太陽信仰と関係している。黒曜石や翡翠に冬至のエネルギー〈タマ・魂〉をうけるため」(『日本人の心と建築の歴史』)とする。

縄文人にとって神さまは山であり、太陽なのである。

## 2 「アマテル」は海人族の信仰

天照の読み方は、「アマテル」と「アマテラス」と両方ある。皇祖神のばあいは「大神」をつけて「アマテラスオオミカミ」という。天照と書くと、「アマテル」と読まれている。

「アマテル」と「アマテラス」という言い方は、内容が異なる。アマテルは太陽のエネルギーを受けて「アマつまり海で自分が照る」。これにたいし、アマテラスは「神さまがアマ、つまり海あるいは天を照らす」。偉い神さまがいてこの世を照らしてくださる、という信仰である。

テルは自動詞で、テラスはどこそこを照らすという他動詞である。日本に古くからあったのはこのうち「アマテル信仰」である。つまり自分が「神さま」になる、という信仰だ。

また「アマ」というのは、「天」とか「太陽」とかを信仰した集団あるいは部族のことをさすが、とくに漁撈民におおい。漁撈民はつねに好天を絶対的に必要とする。そこで天は<sup>あま</sup>どうじ

に海人<sup>あま</sup>ともみられる。その証拠に、各地方に分布するアマ族はこのうち「アマテル」をまつている。漁民の信仰は「アマテル」である。アマ族には、川や湖で漁をする人々も含まれる。

各地にみられる巫女は、みな「アマテル」をまつる。沖縄には「ノロ」とよばれる巫女がいるが、それもアマテルの系統である。壱岐、対馬などにもあり、アマテル信仰は、古い一つの形態をあらわしている。そういうことから、「アマテル」は普通名詞といえるが、もともと、アマテルとよんだかどうかは分からない。

大和盆地のばあい、古くからアマテルを神とするアマ族（縄文人）がいて、そこへ天孫族が九州から瀬戸内海をとおって大和に進入してきたとかがえられる。

すると、鏡作と他田の二つのアマテル神社は、アマテラスを祭る伊勢の皇大神宮よりはるかに古いといえる。

他田の地が、冬至の日の出の遥拝地として重要視されたことは『日本書紀』敏達大王の条にみられる。大王は、即位から4年後、他田に幸玉宮をつくって遷り、その2年後に、日祀部<sup>ひまつり</sup>を他田に設置した。

これについて神話学者の筑紫申真は、日祀部のまつっていた日神は「三輪山に天降って他田で日祭りをうけていた他田坐天照御魂の系統のアマテルの神」で、この日神を天武朝に「伊勢で整備したのが皇大神宮」であるとみている（『アマテラスの誕生』）。

なを、伊勢神宮の起源については、『古事記』の崇神・垂仁記の分注に「伊勢大神の宮<sup>いづ</sup>を拝き祭った」とある。その経緯については、後述する。

## 第4章 アマテラスとタカギノカミ

### 1 高天原の天孫族が大和に進入する

『日本書紀』にみられるアマテラスは、日神→大日<sup>おおひるめ</sup>靈貴→天照大神と3回ほど名前が変化しているの、ややこしい。

はじめは「太陽そのもの」だった。つぎは「日の妻<sup>め</sup>」で「日に仕える巫女」（折口信夫）となり、それから天皇家の祖先神に変化していく。

おもしろいのは、アマテラスが属する神武一族の天孫族である。

『記紀』によれば、高木<sup>たかき</sup>の神をリーダーとする天孫族は、おそくとも2世紀末ごろに軍事力をもって九州の日向から大和へやってきた。かれらは水田地帯にあこがれ、出雲、日向、筑紫、安芸、吉備をへて大和に進入する。その前には高天原にいた。

タカマガハラは農業的に遅れていただけでなく、水田用地にはあまりめぐまれていなかった。そこでタカギノカミをリーダーとする天孫族たちは大和の地で稲作を展開したいとおもった。

かれらはもともと鉄で武装し、船を操つる軍事集団である。かれらは、船で九州を出発する。それを支えたのが九州のアマ族である。なぜアマ族が協力したのか。

『日本書紀』神武天皇の条に、天皇の船が熊野にさしかかったとき、暴風に遭遇し船は翻弄されて進まない。天皇の兄が「わが祖先は天神、母は海神であるのに、どうして我を陸に苦しめ、海に苦しめるのか」と嘆いている。つまり天孫族はもともとアマ族と婚姻関係があったからだろう。

こうして天孫族は大和に進入し、この地を気に入りに、定着する。しかし、大和にいた国つ神と進入者の天孫族(天つ神)は生業も文化もことなる。天孫族は、縄文人のカミにはまったく興味を示さず、自分たちのリーダーの墓、つまり古墳づくりに励んだ。邪馬台国のヒミコの墓か?と注目をあつめている箸墓(3世紀半ば)もその一つである。

アマ族には天孫族を支援するアマ族もいれば、抵抗するアマ族もいたのである。

## 2 アマテラスとタカギノカミ

天孫族には、天<sup>あまてらす</sup>照大神と高<sup>たかぎ</sup>木神という二人のカミがいる。この二神は二大氏族のリーダーであるが、アマテラスとタカギノカミは女と男である。

アマテラスは、託宣的であり祭祀的である。またイネの品種改良をおこなうなど生産的でもある。これにたいしてタカギノカミのほうはきわめて政治的・軍事的だ。二神は連合して、大和の統治を試みた。

これは「ヒメ・ヒコ制」といわれる政治体制で、マツリゴトは巫女の役目で、じっさいの政治は男がやる。この「ヒメ・ヒコ制」に注目したのは、古代史学者の高群逸枝である(『高群逸枝全集4』)が、彼女は男性の歴史学者から今もってつまはじきにされたままである。

ところで「ヒメ・ヒコ制」は、沖縄の古い習俗のなかにもみられる。「オナリ神」信仰といわれるものだ。「オナリ」というのは姉妹で、「エケリ」というのは兄弟のことである。オナリは海を拝み、海にでている兄弟たちの安全を祈る。それだけでなく、オナリ神たちはいつも岸にいて、天候異変があると沖で漁に熱中しているエケリたちに火を焚き<sup>ひれ</sup>領巾を振って危険をしらせた。ヒメがオナリで、ヒコがエケリである。

おなじことは、推古女帝と聖徳太子にもいえる。ヒメの推古天皇が祭祀を司り、ヒコの聖徳太子がじっさいの政治をおこなった。

しかし、アマテラスとタカギノカミの関係は、オナリとエケリという兄弟姉妹の関係でもなく、推古と太子の叔母と甥の関係でもない。赤の他人である。部族的あるいは政治的な関係であるかもしれない。イザナギとイザナミの関係も、それに近いが、この二神は夫婦であり一対で扱われることが多い。

アマテラスとタカギノカミは「中つ国進攻」のために政治的に連合をする。しかし崇神朝にいたってアマテラスとタカギノカミは敵対し、天孫族が二つに割れる。その結果、アマテラスは宮中から追放されてしまう。原因は三輪山の神・オオモノヌシである。オオモノヌシは、進入者のアマテラスを受け入れなかったのである。

### 3 宮中を追われたアマテラス

崇神大王の御代、アマテラスとオオクニタマはともに宮中から追い出される。それについて、『日本書紀』崇神天皇の条に「天照大神・日本大国魂の二神を、天皇の御殿内にお祀りした。ところが神の勢いを畏れともに住むには不安があった。そこでアマテラスを豊稻入姫命に託し、大和の笠縫<sup>かさぬい</sup>邑<sup>のむら</sup>にまつた。よって、堅固な石の神籬をつくった。オオクニタマは淳名城入姫命に預けて祀られた」とある。ここで天孫族とアマテラスの蜜月は終わりを告げる。

さらに垂仁大王の御代に、アマテラスは大和からも追われ、倭姫命に託された。なんのことはない。天孫族は権力を手にすると、いち早くアマテラスとオオクニタマを捨てたのである。

ヤマトヒメは、アマテラスの鎮座する所を求めて伊賀、近江、美濃をとって伊勢におちつく。近くには、松坂という重要な外港があった。松坂は、むかし近畿から東国へ向かう玄関口だった。ヤマトタケルも、東国へはこの伊勢をとった。

また伊勢・志摩一帯は、アマ族の本拠地でもある。アマテラスは、大和にいたアマ族には拒否されたが、伊勢のアマ族には受け入れられたのである。かれらは大和のアマ族とはちがいで、かなり政治的だったのだろう。そうして、伊勢にアマテラス信仰が定着する。

しかし壬申の乱(672)の際に、天武天皇がアマテラス信仰の偉大さに目をつけてこれをまつたところ、人民がみな従った。そこで天武は『記紀』によって「アマテル」を「アマテラス」に変えてしまった。それが伊勢の神である。つまり、天孫族はながらくアマテラスを敬して遠ざけたのである。今日、宮中に祭られているのはタカギノカミであって、アマテラスではない。

崇神から四百年ご、アマテラスは天武・持統天皇(7世紀)によって復活され、そのタマをうけつぐ者が天皇となるシステムのなかに生き、天皇制の背骨(皇祖神)となった。天皇家の祖先神、つまりアマテラスは意外に新しい神なのである。

## むすび

以上述べてきたように、大和盆地には、天孫族、出雲族、アマ族の三者が複雑にからみあっている。単純化すると、聖地の構造はつぎのようになる。

- 一 表層 天孫族(古墳人)



## 二 中層 出雲族 (先古墳人)

## 三 古層 アマ族 (縄文人)

まず、表層には古墳人の天孫族がいる。天孫族は出雲族を征服し、大和に進入して大和王権をつくった。その背景には、アマ族との連合・通婚がある。かれらは、はじめから神社には興味がなく、もっぱらリーダーのための巨大古墳をつくった。

中層には弥生人または先古墳人の出雲族がいる。出雲族は大和盆地の唐古・鍵に大きな環濠集落をつくり、弥生人の統一勢力の拠点としたが、天孫族に進入された。

古層には縄文人のアマ族がいる。三輪山を神とし、冬至の日の出を遙拝し、磐座、勾玉などの痕跡をのこしている。

この関係が三輪山には重層しているようにおもわれる。山はアマ族であり、大神神社の近くにある狭井神社は水の神でコンコンと湧きでる水があるから出雲族であり、その前にある箸墓は天孫族である。あるいはその周囲にも崇神・景行など多数の古墳がある。

以上みてきたように、大和盆地には、天孫族と出雲族とアマ族という三種類の人々の神々が重層しているのである。

### 主な参考文献

- ・網干善教他『三輪山の考古学』(学生社 2003 年)
- ・石野博信『邪馬台国の候補地・纏向遺跡』(新泉社 2009 年)
- ・石野博信他・田原本町教育委員会編『唐古・鍵遺跡の考古学』(2001 年)
- ・上田篤『日本都市は海からつくられた』(中公新書 1996 年)
- ・上田篤『一万年の天皇』(文芸新書 2006 年)
- ・上田正昭他『三輪山の神々』(学生社 2003 年)
- ・大和岩雄・谷川健一編『日本の神々』4 (白水舎 2001 年)
- ・大和岩雄『神社と古代王権祭祀』(白水社 2009 年)
- ・小川光三『増補大和の原像』(大和書房 1985 年)
- ・千田稔「『出雲から三輪へ』(『日本古代史「神々」の遺産』(新人物往来社 1997 年)
- ・高群逸枝『高群逸枝全集』4 (理論社 1988 年)
- ・中山和敬『大神神社』(学生社 2008 年)
- ・筑紫申真『アマテラスの誕生』(講談社学術文庫 2008 年)
- ・松前健「三輪山伝承をめぐる王権思想の変遷」(『日本古代史「神々」の遺産』(新人物往来社 1997 年)
- ・和田萃「三輪山の祭祀をめぐる」(『三輪山の神々』学生社 2003 年)